

# 柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌  
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1  
 柿生中学校内  
 電話:044-988-0004(柿生中学校)  
<http://www.kakio-kyodo.com>  
 第52号

## —発見された132年前の古写真を検証—

### 下麻生の「陣屋」は誰がいつ頃なんの為に建てたのか

「柿生文化」50号に掲載した下麻生の陣屋の写真は、よく見ますといくつか分からないことがありますので、少しあげてみたいと思います。

①陣屋と思われる写真の2階軒先には提灯(チョウチン)らしいものが見えます。これはいったい何でしょう。②建物の屋根はどれも瓦(カワラ)ではないようですが、屋根を葺(フ)いている



明治13年頃の陣屋跡

材料は何でしょうか。③江戸時代はこの陣屋に誰が住んでいて、何をするとところだったのでしょうか。④この建物は現在のどのあたりにあったのでしょうか。⑤江戸時代の各地域の姿を記述した「新編武蔵風土記稿」の下麻生の項目に「陣屋」が出てきますが、同じものなのでしょうか。

これらの疑問を解くためには少し郷土の歴史について触れなければなりません。何人かの地元の方にもお伺いいたしました。

①・②・③については、「陣屋」は主に江戸時代に旗本などの持っている領地を管理する役所で、年貢の取り立てや治安・住民掌握などの仕事をする役人が住宅としても使用していたところと考えるとよいでしょう。

記録によりますと、下麻生は旗本領で旗本(徳川氏の1万石以下の直属の家臣で将軍に直接会うことができました)の安藤氏が江戸時代初期より治めていました。幕末の頃は安藤織部(アノウリベ)ですので、織部が使用していたものと考えられます。明治時代になると民間人に払い下げられて旅館や居酒屋になったようで、2階の提灯様のものはその時に取り付けられたものと思われる。したがって建物もなんとなく風格が失われ、この写真を見る限りでは屋根は瓦葺(カワラヅキ)ではなく、檜皮葺(ヒワダヅキ=檜の樹皮を使用した屋根)か板葺(イタブキ=薄い板を使用した屋根)のようです。ただ写真左側に門らしいものが見え、陣屋の雰囲気は少しだけ残しています。



現在の陣屋跡付近

④については地元の方のお話によると下麻生二丁目27番地のキリスト教会付近だそうです。⑤については、新編武蔵風土記稿には『村の北の方にあり、今畑となれり、何人の居住せしということを知らず』と書かれています。安藤氏の居住であれば分る筈ですが、分らないということは江戸時代以前の中世の陣屋のことを示す、つまり写真の陣屋とは違うものと考えられます。この辺は9月30日(日)のカルチャーセミナーで明らかになるかもしれません。

④については地元の方のお話によると下麻生二丁目27番地のキリスト教会付近だそうです。⑤については、新編武蔵風土記稿には『村の北の方にあり、今畑となれり、何人の居住せしということを知らず』と書かれています。安藤氏の居住であれば分る筈ですが、分らないということは江戸時代以前の中世の陣屋のことを示す、つまり写真の陣屋とは違うものと考えられます。この辺は9月30日(日)のカルチャーセミナーで明らかになるかもしれません。

参考資料:「新編武蔵風土記稿」「武蔵田園簿」「御家人分限帳」

(文:板倉)

## 再開しました

シリーズ 「麻生の歴史を探る」 第22話

## 麻生 地名異聞

## ～麻生は鉄にかかわる地名か～

小島 一也

岐阜の JR 高山本線に上麻生/下麻生という駅があります。こんなところに上/下麻生が？かねてから興味を持っていたところ、旅のついでに立ち寄ることができました。

場所は美濃加茂から下呂温泉に向かう途中駅。高山本線は国道41号線と渓谷美で有名な飛騨川に沿って走っています。予め承知はしていましたが、車社会の今日、旅客は国道に流れて列車は1時間に1本。私の降りた上麻生駅前には閑散たるものでした。それでも整備された広場には立派な観光案内版があり、上/下麻生村は町村合併で七宗町(ヒチソウチョウ)となっていました。聞くと41号線側は道の駅で賑わい、町が誇る日本最古の石博物館(20億年前の上麻生礫岩などを展示)が名所になっているそうです。

私の目的は地名にありましたので町役場を訪れました。来意を告げると担当課長さんが応接室に招き入れ親切に対応してくださいました。話をしていくと、麻生の地名は“鉄”に由来するというのです。麻生の地名の由来は“麻”と思っている私は課長さんと全く噛みあいません。

これを察した課長さんは町の郷土史家を呼んで下さいました。初老のその方は分厚い七宗町誌、郷土資料を持って現れ、「都築郡上/下麻生村の隣に鉄村があること、現麻生区には金程の地名があること、麻生区の姉妹都市茨城の麻生町は鹿島製鉄の砂鉄の産地であること」など、麻生の地名検討資料を丁寧に見せて下さいました。成程、全国の麻と名のつく地名、山名には、鉄鋼、鍛冶、鋳物など鉄との関わりがあります。よく調査したものだと感心させられましたが、正直言って私には今一つ納得がいかない。とうとう日が暮れて、そのまま町の宿に泊まらざるを得ないはめになってしまいました。

その後半信半疑でいた私は、そのことを青葉区鉄町出身で地名研究の著書のある郷土史家金子勉先生に話しました。すると金子先生は「鉄(クロガネ)」の語源は本来は「畔矩(クロガネ)」で、畔道(アゼミチ)が直角という意味と答えられましたが、1週間ほど過ぎて両手いっぱい程の砂鉄を持って訪ねてこられました。聞くと鶴見川旧河川敷から磁石を使って採取したという。そして、「この地方のどの河川にも砂鉄はありますね…」と。

後で分ったことですが、七宗町で得た上/下麻生に関わる資料の中に次のことが記されていました。

白鳳(ハクホウ)3年(652)、神事の氏族忌部勝麻呂、都築郡茅ヶ崎に杉山神社を建立、子孫末代に至り、麻の貢を奉りし故、麻生という。

そして、「忌部族の祖は天目一箇神(アメノマヒツノカミ)、一つ目伝説を伝う」とあり、一つの疑問が解けました。一つ目伝説は鍛冶にかかわる民俗信仰と言われているので、その昔この地方にも製鉄があったのかもしれない。

ちなみに、この岐阜県七宗町の麻生の地名は“あそう”と呼んでいます。全国の麻生の地名の中で“あさお”と呼ぶのは私たちの麻生だけといってよく、それは万葉集東歌に「麻苧(アサヲ)らを麻笥(マケ)にふすさに績まずとも明日着せさめやいざせ小床に【現代語訳:麻の一種である苧(マ・チヨ)を麻かごいっぱい糸にしても明日着物として着るわけではないのだから、その仕事はやめてさあ床(トコ)に入りましょう】と詠まれた苧麻(カラムシ)の“マ”から名付けられたもので、民俗信仰は尊重しながらも、やはり私どもの麻生は麻にかかわる歴史的・文化的に誇りある地名と考えさせられた次第です。



駅名表示板

史料館展示品紹介

がくもんのすすめ  
『**學問のすすめ**』

福澤 諭吉  
小幡 篤次郎 共著

——小幡 篤次郎ってだれ？ なぜ共著？——



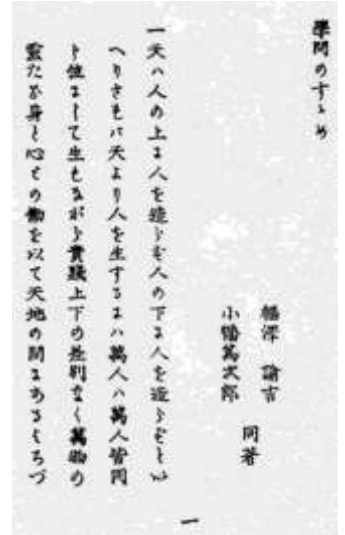
福澤諭吉

「學問のすすめ」は、福澤諭吉によって明治5年2月に初編が出版されました。有名な『天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず』で始まり、明治7年までにはさらに内容を加え、合計17編を刊行しました。これが約25万部も売れ、当時のベストセラーとなり、啓蒙書(ケイモウシヨ=「啓」は開く、「蒙」は暗いという意味で何も知らない人を教え導く書物でイギリス・オランダ・フランスなどで広まった)として広く国民に読まれることとなります。

さて、「學問のすすめ」というと著者は福澤諭吉ですが、初編の1ページ目にもう一人の人物名が載っています。この「小幡篤次郎(オハバ外ケジロウ)」という人物はいったい誰なのでしょう。

福澤諭吉は幕末から3回欧米諸国に赴き、各国の近代化の状況を目のあたりにしてきました。そして日本の近代化の遅れに深刻な憂慮を感じ、日本の将来を考え、早く近代化しなければならないという熱い思いに駆られるのでした。そこでまずは、むかし自分が仕えていた中津藩(大分県中津市)の殿様や有力者に説いて中津市学校という洋学校を設立させ、藩の子供たちに新しい学問の意味を知らせようと筆を執ったのがこの「學問のすすめ」であったわけです。

しかし、一つ問題がありました。福澤家は中津藩の中で13石取りの下士(身分の低い武士)出身で、多くの人たちに自分の意見を述べ、説得させる自信がとてなかつたのです。そこで、昔は家老の家柄で200石取りの上士(身分の高い武士)である小幡篤次郎と共著にすることを考えたわけです。小幡は大変優秀な人物で、わずか23才で中津藩の藩校(藩の学校)であった進修館の教頭になり、その才能を買われ江戸幕府の学校の開成所の助教授にもなっています。やがて欧米諸国を歴訪し慶応義塾の塾長にもなりました。進歩的な諭吉にも人に言えないこんな苦勞があったわけです。(文:板倉)



「學問のすすめ」

第36回カルチャーセミナー

大反響の「うっし世の静寂に」

映像と制作者、  
小倉美恵子氏の講演

7月30日(日)川崎市アートセンターで、最近話題になっている「うっし世の静寂に」の上映会と制作者の小倉美恵子さんの講演会が開催されました。



講演する小倉美恵子氏

大変多くの方々が来場され、熱心に映像をご覧になり、講演を聞かれていらっしゃいました。当日は映像に登場されていた吉沢伊佐夫氏もいらっしゃっており、黒川の「くろつけ」等の農作業についてのご苦勞についてもお話をいただくことができました。

私たちが祖先から脈々と受け継いできた生活や伝統の中に現代人が忘れかけている貴重な何かがある。それは人々の絆や人間関係、優しさ、温もり、感謝など、まさに現代人に発信しているメッセージではないかと感じました。

**郷土の歳時記**

9月 長月=読みながつき=意味夜がだんだん長くなるということや、「稻刈月=いなりづき」を略した言葉とも言われています。

**◎風祭り(カゼマツリ・カガマツリ)=9月1日**

・風を鎮めるため二百十日(立春から数えて210日目)で台風襲来の多い日といわれる。今年(8月31日)の前後に行う祭。黒川では毎年9月1日に行われ台風が来ないように、また被害が少ないように、作物の豊作を祈ります。この日の午後ほとんどの家でも仕事を休み、氏神様の汁守神社の拝殿や境内の掃除をしてお祭の準備をし、村人が集まると氏子総代の音頭で拝殿に拍手を打って礼拝します。

**◎重陽の節会(チョウヨウノセチエ)=9月9日**

・中国の考えで奇数は「陽数」、偶数を「陰数」とし、陽数が二つ重なる9月9日は重陽の節句と言って陽数の中でも最も極みとなる日とし縁起の良い日とされていました。結婚式の「三々九度の杯」はこのことが起源となっています。日本では天武天皇14年(685)9月9日に初めて菊花の宴(キッカノウタゲ)が催されました。

**◎十五夜(ジュウゴヤ・「仲秋の名月」ともいわれます)=9月30日(旧暦の8月15日)**

・9月の満月の夜に澄み切った秋の夜空に輝く名月をめぐる行事です。柿生では昔、御供え餅(米の団子15個)は子供たちが黙って持っていてもよく、縁起が良いといわれていて、わざと取りやすくしておいた家もあったそうです。十五夜を祝ったら必ず十三夜も旧暦9月13日に行います。

**⇐⇐ 柿生郷土史料館開館日のご案内 ⇨⇨⇨⇨⇨⇨⇨⇨**

◎開館日:偶数月は土曜日、奇数月は日曜日

9月2, 9, 16, 30日(毎日曜日) 9月23日はお彼岸のため休館とします。

9月30日はカルチャーセミナー開催(下記催物案内を参照ください)

10月6, 13, 20, 27日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時

**⇐⇐ 柿生郷土史料館開館日8～11月の催物 ⇨⇨⇨⇨⇨****第6回特別企画展**

◎テーマ 『写真でたどる郷土百年の歩み展Ⅱ ～昭和20年より今日まで』

◎期 間:8月18日～11月25日

◎特別展示 写し出された132年前の下麻生の姿も展示しています。

**第37回カルチャーセミナー**

◎テーマ 64年前の空中写真がとらえた歴史の足跡

～先端技術が解析する郷土の遺跡と自然～

◎講 師 朝倉一貴氏 (國學院大学大学院博士課程)

◎日 時 9月30日(日) 13:30より

◎会 場 柿生郷土史料館

◎内 容 終戦直後のアメリカ軍の高精細空中写真を先端技術で解析し、郷土の古代～近世の遺跡や過去の自然の姿を探索する。